

日本漢方協会通信

2023年11月

黒焼きの話

会員 田口 哲之

みなさんは黒焼きというものをご存知でしょうか。これは植物、動物性の原料を炭化させることにより薬効を期待したもので、様々な物を黒焼き（霜）にして使われてきた歴史があります。現在では薬事法上等の問題から、その使用は制限されていますが、漢方の世界では最近まで使われてきたものです。

その中にはいいかげんな物も多くあったようで、大正10年発行の「黒焼きの研究」小泉榮次郎著の中には「惚れ薬として用いる輩あり、このような妄説があるから、黒焼きの効験も皆迷信と言われるのだ」と怒っています。

落語の世界でもこの黒焼きの話はいくつかあります。一つ紹介しますと「薬違い」という題で「長屋の大家の娘に惚れた男が、惚れ薬といわれていたイモリの黒焼の粉を友人にたのんで、干してある娘の着物に振り掛けたが全く効果が無い、実はヤモリの粉であった。」という落ちです。世の中そんな都合の良い物があるわけないのですが、私が子供の頃には買い求める者がいたようです。

私の実家は東京の下町で薬局を営んでいました。小学校から帰ってくると店の横の路上で、何やらトカゲの様な黒く乾燥した物を、何匹か紐で縛って並べています。売り手は年配の女性で、客であろう若い男が、ひそひそと声を殺して話をしています。何だろうと友達と近寄って行くと、野良犬のようにシッシッと追い払われた。おそらく恋の悩みで何とかならないのかと相談していたのだと思います。父親は薬屋の前で、こんなものを売られて迷惑しているが、往来上だし困ったものだと言っていたのを思い出しました。私が漢方を始めてから、これがイモリの黒焼きだったと、やっと分かった次第です。

このようないいかげんな物がある反面、治療として使われていたものも有ります。漢方薬として白州散（本朝経験）という方剤です。これは鹿角、反鼻、津蟹、を黒焼（霜）として使用します。「内服で、虚証のカルブンケル、フルンケル、皮下膿瘍、歯槽膿漏、肛囲炎、痔瘻、などの化膿症で膿が出難く、あるいは膿が出て肉の上がり悪く、口がふさがり難いものに使用する。」との記載があります。内服としての使用ではないが、身内の歯科医が治療用の薬品で痛み、長年硬化した手の湿疹に白州散を軟膏として使用し、きれいに治した経験があります。白州散は急性期でなく長年治らない疾患に効果があるようです。

漢方家細野史郎はアレルギーで原因となる食物を黒焼きにして服用させることで治療した例を報告しています。少量ずつ使用し、脱感作させる事が出来ると述べています。その中には饅頭まで黒焼きにして、食べられるようになったとの事が書かれていました。このような治療は入院して慎重に使用する必要があるかと思えます。

中国の生薬店で多くの炭化した生薬を見たことがあります。それぞれの薬効がどのようなものであるか、興味のあるところです。国内においても黒焼は過去のものとしてではなく、今一度臨床上の効果を見直してはどうかと思えます。